

# すべての努力は現場のため

レスキュー隊員(特別救助隊)  
栗田 篤さん

「生きがい」や「働きたい」。  
そんな言葉がふさわしい人に会うと、  
なぜか小さな勇気を  
もらったような気持ちになります。  
このコーナーでは、私たちの身近なところで、  
そうした思いで働いている方々を  
紹介していきます。

第7回  
将来へのまなざし

火災や交通事故、地震をはじめとする自然災害

など、さまざまな災害現場において救助活動を行うレスキュー隊(正式名・特別救助隊)。今回は、東京消防庁上野消防署でレスキュー隊員として働く栗田篤さんにお話を伺いました。

## ●迷いなく消防士の道へ

「兄が自衛官ということもあってか、以前から、いざと言うときに現場で必要とされる人間になりたいと思っていました。だから仕事のことを考えたときにも、すぐに消防士が頭に浮かび、迷うことはなかったです」。大学卒業後の進路として消防士を選んだ理由を、こう話す栗田さん。消防士になって8年目。現在は上野消防署のレスキュー隊で副隊長を務めています。当初は特にレスキュー隊を目指すつもりはなかったと言います。その考えが変わったのは、新人消防士が全寮制で消防業務の基礎知識や技能を身

に付ける消防学校でのこと。

「教官がレスキュー隊をやっていた方で、カッコよくて憧れました。常に現場の最前線に出て行くのがレスキュー隊。自分も最前線で仕事がしたいと思うようになりまして」

しかし、レスキュー隊になるための選抜試験を受けることができるのは、消防士として1年以上経験を積んだ後。そのため、栗田さんは、配属先にレスキュー隊がある消防署を希望。8カ月間のカリキュラムを終え消防学校を卒業した後は、希望通り、武蔵野消防署へ配属となりました。

「消防署の中にはいろいろな部隊がありますが、誰でも最初は必ずポンプ隊として活動します。ポンプ隊は、火災現場で消火活動を行うほか、救急車と連携して救急活動を行ったり、また、レスキュー隊の支援という形で救助活動も行う部隊です。火災現場への出場よりも救急車と一緒に出場し、救急活

動に当たることが多く1日2〜3件ありました。

初めて火災現場へ出場したのは、配属から10日ぐらいたったところ。朝方に起きたアパート火災だったので、建物の中にまだ人がいるという情報があり、先輩に続いて中へ入ったところ、煙が充満していて真っ暗闇。何も見えない状況で、頭の中が真っ白になり、体も思うように動きませんでした。やはり怖いという気持ちもありましたし、これは大変な仕事だと痛感しました」

## ●辛い経験も次への糧に

課せられた任務の厳しさに直面した後、持ち前の根性を発揮し、日々の訓練と現場での経験を積み重ねていった栗田さんは、翌年、目標としていたレスキュー隊の選抜試験に挑戦。競争率6倍の難関をくぐり抜けて合格し、1カ月半の研修を経て、レスキュー隊の予備隊員になりました。

実は、レスキュー隊の正隊員になれるのは、1小隊6名(地域により5名)の定員に空きが生じたときだけ。それまでの間、予備隊員はレスキュー隊員とともに訓練したり、現場でさらに経験を積みながらさまざまな勉強をしていくのです。

「予備隊員になって初めて受けたロープの訓練は、今までで一番つらかった訓練です。直径12mmのロープをそれぞれ左右の手に持ち、腕の力だけで15m上らないといけないのですが、途中で腕がパンパンになり上れない。先輩は『上れ!』と言うけれど、どうにもならない。結局『降りていい!』と言われるまでぶら下がりっぱなしです。もちろん、今は上れますよ(笑)」

一般の消防士より出場範囲が広いレスキュー隊は、火災や交通事故、列車事故をはじめ、さまざまな現場で任務にあたります。なかには、風呂場の排水溝に突っ込んだ手が抜けなくなった人を削岩機を使って救助したこともあるのだとか。

「どんな現場でも、救助できた瞬間が一番うれしいです。必要とされたとき、それにしっかりと応えられることにやりがいを感じています」

しかし、人の死と直面するこ

とも少なくないのがこの仕事。「火事で逃げ遅れた子どもが見つからず、消火後も一帯の灰を掘り起こして小さな遺体を見つけたことがあり、今も忘れられません。でも、無理にでも気持ちを前向きに切り替え、その経験を生かし、次の現場では必ず助けようという気持ちでいます」。

## ● 訓練・勉強に終わりは無い

レスキュー隊の正隊員となって今年で4年目。2008年4月から上野消防署のレスキュー隊で副隊長を務めている栗田さんが今心掛けているのは、隊員間のチームワーク作り。「隊をまとめるのは隊長ですが、隊員をまとめるのは副隊長の役目。隊の指揮

を取り、隊外にもいろいろ役割がある隊長に対し、副隊長は隊員同士をまとめる重要なポジションなので、隊員たちと積極的にコミュニケーションを取るようになっています」。そんな栗田さんの目下の目標は、隊長になること。ご自分の隊の隊長のように、そこにいるだけで安心感が持てる隊長になりたいのだとか。ちなみに、レスキュー隊に在隊可能なのは隊員35歳、隊長45歳まで。このことから、どれほど高い身体能力を必要とする仕事かが分かります。そこで、栗田さんの考える、レスキュー隊員に必要な資質について伺ってみました。その答えは、気力と体力、そして根性。

「あと、うちの隊員を見ると、何にでも興味を持って勉強していますね。例えば列車事故の現場へ行けば、列車の構造や電気の流れを知っていないといけない。私も休みの日を利用して民間の資格講習会などに行っています。何が起ころるか分からない現場で、的確に判断を下し、対応するためには、いろいろな知識が必要ですから」

さまざまな災害現場で活躍するレスキュー隊。その活躍の陰には、日ごろの地道な訓練と努力がありました。

